

氏 名	すぴに くんらん SUKPINIJ KUNLANUN
学位(専攻分野)	博 士 ( 学 術 )
学 位 記 番 号	博 甲 第 1 1 2 4 号
学位授与の日付	令和 6 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 建築学専攻
学 位 論 文 題 目	The Urban and Accommodation Development Caused by Tourism in Chiang Mai, Thailand (タイ国・チェンマイにおける観光による都市及び宿泊施設の 開発)
審 査 委 員	(主査)准教授 高木 真人 教授 角田 暁治 教授 西田 雅嗣 准教授 大田 省一

## 論文内容の要旨

本学位請求論文は、タイ・チェンマイ地域を事例として、1880 年代から 2020 年代までの期間を対象とし、観光化によって引き起こされた都市化と宿泊施設の発展について扱ったものである。

本論文では、近代以降のチェンマイの観光化を大きく 3 つのフェーズに分け、それぞれの時期の観光の特徴と各地区を結び付けて論じている。まず、チェンマイの観光のルーツを、アメリカ人ミSSIONナリーの保養のための訪問に求めている。彼らは冷涼な気候を求めてドイ・スーテップに別荘を建てた。続いて 1890 年代から 1920 年代には、森林伐採業者がチェンマイに滞在するようになり、レジャーやスポーツなどを含めた西洋式ライフスタイルを持ち込んだ。1930 年代には鉄道がチェンマイまで開通し、近代的ツーリズムの時代がチェンマイに訪れ、ホテル、公共交通等が整備され、各種イベントが開催されるようになった。1921 年にはチェンマイ初の近代的ホテルがオープンしたが、これは当時の世界的なツーリズムの開花に歩調を合わせたものであった。このような都市開発に対応するため、土地利用計画マスタープランや大規模開発・高層建築の規制が行われるようになった。これにより新規ホテル地区の建設は抑制され、代わりに小規模な宿泊施設が市内に出現するようになる。近年 2009 年以降は、モンチャム地区などの市街地から離れた周辺村落地域に、自然環境に親しむことを目的としたツーリストヴィレッジが建設されている。以上のように、チェンマイの観光化は、時期により明確な特徴が見受けられ、開発地区が時期ごとに移り変わっていくことが一大特徴として挙げることができる。近代以降の都市開発そのものを考える上でも、観光化は主要なファクターであることが提示されている。

本論文では、以上のようにチェンマイの観光化による都市開発を時系列に従って実証的に述べる一方、観光化という事象の検証には、Jansen-Verbeke による文化的景観の構成要素に関する議論や、R.W.Butler による「ツーリズム・エリア・ライフサイクル (TALC)」論を応用して、対象地域の分析を行っている。これにより、チェンマイ地域の 3 つの対象地区が、Exploration-Involvement-Development-Consolidation-Stagnation という TALC の各段階を別個のかたちで経過していることが示され、チェンマイの観光化による開発の特徴が、時期ごとに場所を変えて進行したことが検証された。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、チェンマイの近代における都市開発を観光化との関連の中で述べることを目的としている。従前の視点では、工業化・産業化による都市化に着目することが一般的であったが、チェンマイの場合は、産業化という視点では、森林伐採の集散地としての都市開発は限られた期間に起きた一過的な事象であり、チェンマイの都市化を検証するには一面的に過ぎるきらいがあった。それに対して、ここでは観光化に着目することでチェンマイの都市化を通時的に検証することに挑んでおり、必ずしも工業化がリードするわけではない、アジア地域の都市化研究の貴重な事例となることが期待される。但し、観光化という枠内に含まれる事象が避暑からイベントまで幅広く、また対象地が広域にわたるため、時期を区切り、それぞれの時期に開発が進展した地域に焦点を当てて論述をする方法を取っている。具体的には、1) 宣教師が先導して王族にも波及した、ドイ・スーテップ山を中心とした避暑地開発、2) 鉄道開通により引き起こされた、城内など中心市街地での都市型ホテルによる開発、3) 自然環境・景観を重視した余暇のための、モンチャム地区を事例とした郊外開発、という3つのフェーズを設定した。これにより、チェンマイ地域の観光化と場所の関係の特性を抽出することができ、観光化による都市開発を通時的に記述することが可能となった。このように、観光化において時期区分と地区に明快な対応をみることができたのは、年代の画期となる出来事があったためで、ドイ・スーテップは仏教の聖地であったためマスツーリズムを受け容れることはなく、城内では行き過ぎた開発を抑えるため建築規制が敷かれた。これらの結果として、3地区はそれぞれのタイミングで栄枯盛衰を経ていることが、合わせて述べられている。

以上のように、テーマに即した事象の発掘、検証に努め、チェンマイの観光化による都市開発を通時的に描き出すことは十分に果たされたと思われるが、さらに本論では観光学の理論を応用することで、都市化の発展段階の検証を行っている。ここで応用されている理論としては、まずJansen-Verbekeによる文化的景観の構成要素に関する論である。文化的景観を考古学的地域、歴史的都市景観、農業遺産システム、保養型ランドスケープに分類するもので、性格の異なる地区を扱う際の整理に有効に活用されている。次いで、R.W.Butlerによる「ツーリズム・エリア・ライフサイクル (TALC)」論を応用し、対象地域の分析を行っている。これにより、チェンマイ地域の3つの対象地区がTALCの各段階を別個のかたちで経過していることが示され、チェンマイの観光化による開発の特徴が、時期ごとに場所を変えて進行したことが論理的に検証された。

本論文の論考に際しては、タイ国内はもとより米国、日本などの公文書などの文書資料や統計データ、航空写真を含む写真・地図史料を使用し、関係部署でのインタビューなどを通じて実証的研究を行う一方、特にモンチャム地区では、旅行者向けアコモデーションに対する現地調査を実施し、モデル図を作成して建築的特徴を系統化して分析している。

本論文の学位請求に際しては、以下のものが基礎論文として合わせて提出されている。いずれも査読を経た国際学会での発表論文である。2本とも本論文の基幹部分を成している。

Kunlanun Sukpinij, Ota Shoichi, "The Development precess of Large-scale Hotel clusters and their Relationships between Urban Facilities and Tourist Attractions in Chiang Mai,

Thailand”, DARCH International Conference on Architecture & Design, 2023, pp.30-35.

Kunlanun Sukpinij, Shoichi Ota, ”The Formation Process and Accommodation Development on Mountainous Farmland of Mon Cham, Chiang Mai”, ICAMC2023. (以下の学術誌に掲載済：*Advances in Science and Technology*, Vol. 137, 2024, pp.87-96; <https://doi.org/10.4028/p-A5gwU1>)